なしに能合申候儀と、日ごろ戯言に申出候迄にござ候とあり、これもとよりチンの名義にはあらず、をかしきことなれば、こゝに錄す、さてチンの名義、例の押あてながら、犬に似て小きもの故、ちいといひしが、チンとなりしにや、近時チンも位を給はりしと云る物がたりあり、耳袋に、天明九年、ある大名衆、上京のことありしに、常に寵愛のチン、あとを玄たひて付隨ひしかば、やむことを得ずして召つれしことさたありて、天聽に入ぬれば、畜類ながら、主人の跡を慕ふ心あはれなりとて、六位を賜はりしとかや、これを聞て、何者か喰ひ付犬とは兼て知ながらみな世の人のうやまわんく、根なしことには有べけれど、其節處々にて取はやしけるまゝ玄るすといへり、

〔類聚國史百九十四殊俗〕天長元年四月丙申、契丹大狗二口、猗子二口在前進之、

〔傍廂前篇〕ちん犬

嫋犬をチンといひて、狆字をあてたれど非なり、狆は字書に狂也とありて、くるふ事なり、小犬のチンは字音にあらず、ぢいぬの音便にて、ぢいぬは、ちいさいぬの略なり、もと皇朝の物ならねば、名はなかりしなり、類聚國史に、○中略契丹大狗二口、猗子二口在前進之、これ皇朝に嫋犬わたりたる始なり、

〔俗耳鼓吹〕此頃狆の名とて、人の見せけるをみれば、

壹まい黑　壹まい白　白黑ぶち　目黑　鼻黑　赤ぶち　栗ぶち　かふり　むじな毛

耳は大耳べつたりだれ　毛なが　毛づまり

當世は地ひくの毛長流行申候

上田すじ　こくすじ　冶郎すじ　小田すじ　大島すじ

〔狆飼養書〕一夫狆は、いにしへ交趾國より渡り候て、交趾の狗ゆへ、交趾狗と申候、いつの頃よりか、毛ものへんに中と、中文字にて、狆と書ならわし申候、又かぶりと申は、阿蘭陀人持渡り候、水犬と